

歯科技工部門だより

歯科技工部門 山野井 敬彦

4月1日付で歯科技工部門歯科技工士長を拝命致しました山野井敬彦です。

40年間在籍しておりました木村歯科技工士長の後任として、至らぬところは多々ございますがご指導のほどよろしく申し上げます。

さて現在歯科技工士を取り巻く環境はますます厳しくなっております。

数年前に歯科技工士国家試験受験者が1000人を割ったという事が話題になりましたが、昨年すでに800人を割っております。(私が卒業した当時は全国で毎年約3000人が卒業しておりました)単純に都道府県数で割ると1県あたり10数名の新人しか充当出来ない事態になっています。また、そのうちの半数以上が5年以内で離職してしまうという調査結果もあります。現在就業している歯科技工士数は約30000人ですがその内約半数が私と同年代の50代以上です。

2018年より8回におよぶ厚生労働省が開催した「歯科技工士の養成・確保に関する検討会」でも議論がおこなわれておりますが解決策は見出せておりません。5校あった国立の歯科技工士専門学校も新潟大学が閉校となり医科歯科大学と広島大学が4大に移行した後、残っていた東北大学も来年度募集停止となりました。国立の専門学校としては大阪大学のみとなりました。

そのような中、幸いにして当部門は小林副院長長及び小野教授、木村元歯科技工士長の御尽力により、新人2名を確保し従前の6名体制を維持する事が出来ました。2名の女性が加わり雰囲気が変わりましたねと言われることも多いです。

歯科技工部門は病院の診療支援部に属しており

ますが検査、放射線、リハビリ、臨床工学、歯科衛生の各部門の中で人数が1番少ない部門です。そしてその業務内容についても認知度が1番低いのではないのでしょうか。先ずは病院内から当部門の取り組み等を認知して頂く事から始めていこうと思っております。

前回歯学部ニュースにレーザー溶接機について書かせていただきましたが、今回は当部門において最近行われている技工についてお話しさせていただきます。

先ずは高周波鋳造機の導入により金属床義歯を内製出来る事になった事が非常に大きな変化です。この事により製作できる補綴物の幅が広がりました。学生実習の校費負担金属床義歯の製作も行っております。また、顎義歯、舌接触補助床、スピーチエイド、ホッツ床、放射線照射時の保護シーネなどの装置を製作する事が多くなりました。



また、今年度から医科からの依頼を受けて気管挿管時に用いる保護シーネの製作も始めました。新たに導入された3Dプリンターを用いて術前シミュレーション用実物大臓器モデルの製作も開始致しました。他大学においては数年前から石膏系の高額な3Dプリンターが導入されておりましたが安価で高性能なForm 2により光造形樹脂製の骨モデルが製作可能になりました。現在は口腔外科からの依頼で主に頭蓋骨を造形しております。3次元画像可視化システムソフトウェアも購入いたしましたので当部門でDICOMデータから必要部位を抽出し、STLデータに変換し造形を行います。依頼があれば他の臓器につきましても造形を行う予定です。ご興味のある方はどうぞいらして下さい。

今後スキャナーとソフトウェアが導入されるとステント、トレー、金属床フレーム等を造形することが可能となります。顎補綴・顔面補綴への応用や他にも様々な用途で活用が見込まれますので今後は楽しみな装置です。

外来においても口腔内スキャナーの導入やデジタル化が今後一気に進むと思われますが当部門におきましてもCAD/CAM装置の導入が喫緊の課題です。早急に導入できるようあらゆる方法を探り実現に向け努力いたします。先にも申しましたが当部門は6名で業務を行っておりますので昨今の働き方改革の実現のためにもどうしても必要な

装置となります。そして職人としての側面もある歯科技工士ですので技術をさらに高めていくことももちろん大切ですが、大学病院の歯科技工士として医科との連携ができるような医療人としての歯科技工士を目指し、(最近の言葉で言いますと)歯科全体でONE TEAMで業務を行っていきたいと思います。

今後とも歯科技工部門をどうぞよろしくお願いいたします。

